

"Detective is, or ought to be, an exact science."

Conan Doyle

## 「探偵という仕事は一つの厳正な科学であり、またそうあるべきだ」 コナン・ドイル

シリーズ「シャーロック・ホームズ」の第二番目「The Sign of Four」(『四つのサイン』)の中の一節です。

この物語は、コカインを注射しているホームズを見てワトソンが医者としていさめる場面からはじまります(当時コカインやアヘンは薬局などで簡単に入手できました)。それに対してホームズは「おもしろい仕事さえあれば意気が上がるんだが」といっていろいろ議論を吹きかけてきます。そのやりとりの中でホームズは、ワトソンが書いた前作の『緋色の研究』に言及して「探偵という仕事は一つの厳正な科学であり、またそうあるべき」なのに、「科学として冷静に感情を交えずに扱うべき探偵の話にロマンティックな味つけをした」と非難します。



『四つのサイン』には、依頼人としてミス・メアリー・モースタンという控えめでチャーミングな女性が登場します。10年前に行方不明になった父に関連するらしい不思議な事件が起こったので相談に来たのです。ワトソンはこの女性に一目ぼれし、事件が解決したときにはすでにプロポーズもすんで、結婚することを決めていました。ワトソンの告白を聞いたホームズは、「そうなるんじゃないかと思っていた」といいながらも、「I really cannot congratulate you.(おめでとうは言えないね)」と申します。相手の人柄は申し分ないけれど、ホームズにとっては恋愛は感情的なものなので、彼がもっとも大切にしている冷徹な理知と相容れないからです。だから、「判断を狂わせないように、ぼくは一生結婚しない」と宣言するのです。冒頭の議論は、ワトソンの結婚の伏線となっていたことがわかります。

この事件の解決後、ワトソンは結婚のため、ホームズと一緒に住んでいたベーカー・ストリート221番地Bの下宿を出ます。これ以後の作品では、ホームズが占有することになった下宿をワトソンが訪れて話し合うことになります。

ワトソンは再び開業医となり、幸せいっぱいの新婚生活を送って7ポンド(約2.6Kg)もふとって次の短編集『シャーロック・ホームズの冒険』にまた登場してきます。

このように、冷酷といえるほどに理知的なホームズとは対照的に、ワトソンは感情も豊かで人柄も暖かく、きわめて常識的です。議論では到底ホームズにかなわなくて、いつも言いなりになっていますが、その人間味がホームズの特異性を引き立て、物語全体に魅力を与えています。このシリーズの人気はワトソンのおかげだという人もあるくらいです。

最後は「シャーロック・ホームズ」発表当時の挿絵についてのお話です。1888年に『緋色の研究』が単行本として出版されたとき、ドイルは出版社に頼んで父親のチャールズ・ドイルが挿絵を描くよう取り計らってもらいましたが、結果は失敗でした。絵そのものが稚拙だった上に、ひげをはやしたホームズはおよそスマートではなかったのです。

しかし、1891年7月、ストランド・マガジンに掲載された『ボヘミアの醜聞』に、挿絵画家シドニー・パジェットが描いた挿絵はホームズのイメージにぴったりで、特に女性に受けたそうです。ホームズのモデルはシドニーの弟のウォルター、ワトソンのモデルは弟の友人でした。三人は同じ学校の仲間だったので、ホームズが有名になった後そろって音楽会に行ったら、客席にいた婦人が「まあ、ホームズが来ましたよ！」と声を上げたというエピソードが残っています。シドニー・パジェットはホームズ物語のために、全部で357枚の挿絵を描きました。